長岡新田関係遺跡

（第５次）

落合Ｂ　羽場垣外
発掘調査報告書

1989年

長野県伊那建設事務所
箕輪町教育委員会

長岡新田関係遺跡

1989年

長野県伊那建設事務所
箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会
教育長　**堀　口　　泉**

箕輪ダム建設に伴う計画は、昭和40年代後半から進められてきました。昭和55年に上伊那広域水道用水企業団が設置され、ダム建設に伴う開発が具体的に動き出したのであります。それと平行して、関係地域一帯に分布する埋蔵文化財調査も実施されました。

昭和59年度から引き続き実施された調査は、確認調査においても６地点、本調査は４遺跡に及び、本年度の落合Ｂ・羽場垣外両遺跡の調査へと進んだのであります。ダム建設に伴う埋蔵文化財調査は一応本年度で終了の予定となります。

新田の谷は数千年以前から人々の生活があり、諏訪地方との交通上から考え、そちらとの交流も古くから存在したものと考えられます。

悠久の歴史を秘めた長岡新田の歴史が、幕を閉じることになるわけですが、本書に残された記録が、長岡新田の歴史を伝える一助となれば、この上ない幸いと存じます。

数年に及んだ調査にご協力、ご援助下さった多くの皆様方に深く謝意を表する次第であります。特に、直接発掘作業に当られました調査団の皆さんや、本報告書作成に従事された関係各位に厚く御礼を申し上げまして序文といたします。

例　　言

1．　本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪長岡新田に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．　本調査は、長野県伊那建設事務所の委託を受けた箕輪町教育委員会が実施した。

3．　発掘調査は、昭和63年８月31日～９月16日まで実施した。

調査終了後に整理作業を実施し、引き続き報告書作成を行った。

作業の分担は次の通りである。

遺物の実測・トレースー赤松　茂、根橋とし子

遺物拓影ー赤松　茂、根橋とし子

挿図作成ー赤松　茂

写真撮影・図版作成ー赤松　茂、井上武雄

既出遺物に関しては、昭和61年に発行された報告書「長岡新田関係遺跡」より抜砕、引用した。

4．　本書の執筆は赤松　茂、柴　登巳夫、樋口彦雄、宮脇陽子が行った。

5．　本書の編集は赤松　茂、井上武雄、柴　登巳夫、根橋とし子、宮脇陽子が行った。

6．　石質鑑定は調査団長樋口彦雄氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

7．　出土遺物及び図版類はすべて箕輪町郷土博物館に保管されている。

目　　次

題　　字　　団長　樋口彦雄
序　　教育長　堀口　泉
例　　言
第Ⅰ章　調査地の立地……1
第１節　位置……1
第２節　自然環境……2
第３節　歴史的環境……2
第Ⅱ章　発掘調査の経過……5
第１節　調査の経過……5
第２節　調査の概要……5
第３節　調査日誌……7
第Ⅲ章　落合Ｂ遺跡の調査結果……9
第１節　調査結果の概要……10
第２節　層　序……10
第３節　遺　構……11
１）１号土坑……11
２）２号土坑……11
３）３号土坑……12
４）集　石……12
第４節　遺　物……13
１）土　器……13
２）石　器……13
３）既出遺物……14
第Ⅳ章　羽場垣外遺跡の調査結果……21
第１節　調査結果の概要……21
第２節　層　序……22
第３節　遺　構……25
１）１号集石……25
２）２号集石……25
３）溝　址……26

第４節　遺　物……28
１）土　器……28
２）石　器……28
３）既出遺物……28
第Ⅴ章　まとめ……29

挿　図　目　次

第１図　位置図……1
第２図　遺跡分布図……3

落合Ｂ遺跡

第３図　調査区設定図……9
第４図　全体図……9
第５図　土層断面図（Ｃ－２グリッド南壁）……10
第６図　１号土坑実測図……11
第７図　２・３号土坑実測図……12
第８図　集石実測図……12
第９図　出土土器拓影図……13
第10図　出土石器実測図……13
第11図　既出遺物……14

羽場垣外遺跡

第12図　調査区設定図……21
第13図　土層断面図（Ａ－１グリッド北壁）……22
第14図　全体図……23
第15図　１・２号集石実測図……25
第16図　溝址実測図……27
第17図　出土土器拓影図……28
第18図　出土石器実測図……28
第19図　既出遺物……28

図　版　目　次

落合Ｂ遺跡

図版１　調査地より南方を望む・調査地近景
図版２　調査地全景・土層断面
図版３　１号・２号土坑
図版４　３号土坑・集石
図版５　調査風景
図版６　出土土器・出土石器

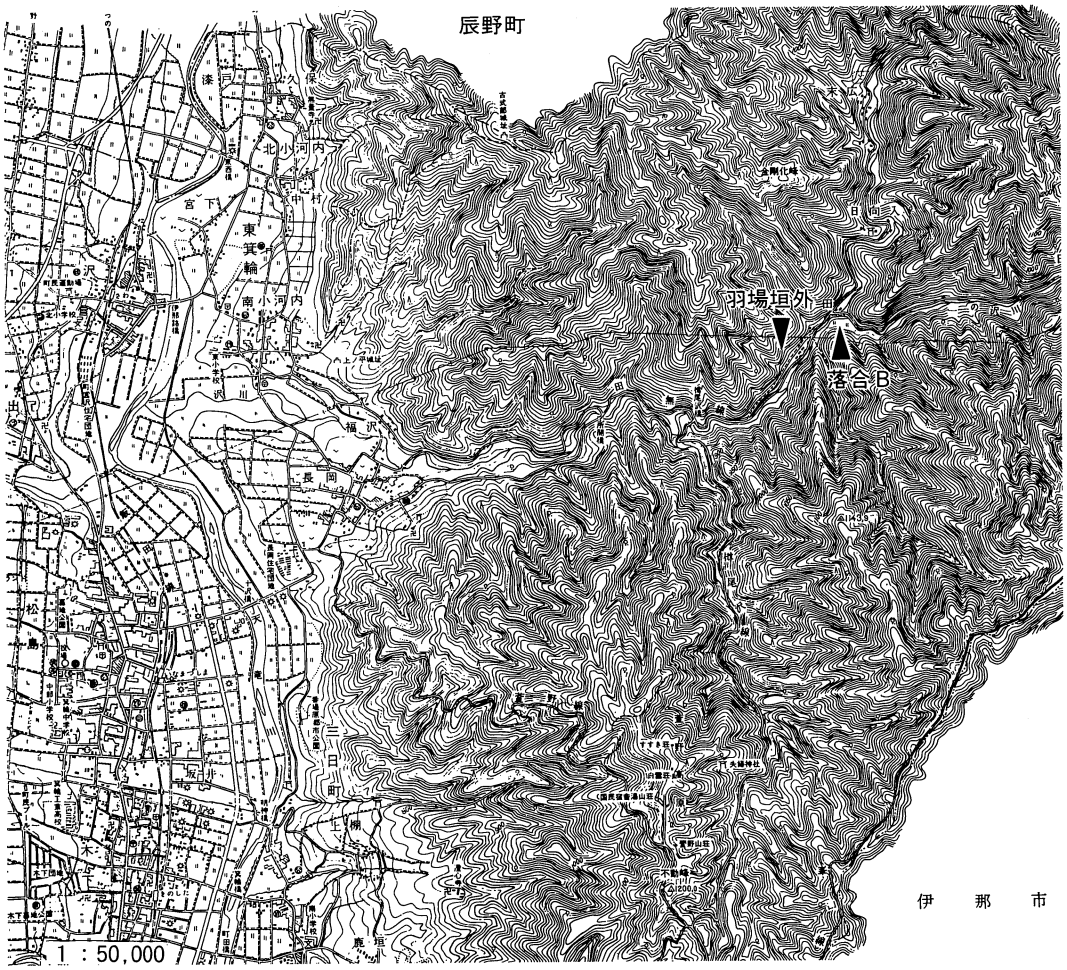
羽場垣外遺跡

図版７　調査地より南方を望む・調査地近景
図版８　調査地全景・土層断面
図版９　１号・２号集石
図版10　溝址・発掘調査団
図版11　調査風景
図版12　出土土器・出土石器

第Ⅰ章　調査地の立地

第１節　位置（第１図）

上流より流れ出た２つの川の合流点とほぼ同位置の左手高台に、小さな谷川から水を引き水田が開かれている。そのほぼ中ほどに４アールの桑畑があり、このすぐ下に落合Ｂ遺跡が位置する。これより200mほど下流の右岸に羽場垣外遺跡が位置している。沢川の右岸は左岸に対してやや平地が多く耕地も見られる。羽場垣外地点は川に平行して数十㎡余の平地があり、北側の背後が10mほどの急な土手になっている。この土手の上に南面する傾斜面に畑が開かれており、ここが遺跡地である。標高は、落合Ｂ遺跡が840m前後、羽場垣外遺跡が約832mである。



第１図　位置図

第２節　自然環境

南流する天竜川に注ぐ中小河川は、扇状地・田切地形・台地を形成している。町内において竜東地区では沢川が最も大きな川であり、流路は約10kmである。沢川によって形成された扇状地の上に長岡区がある。ここは土地が肥沃で壌土も深く、根菜類の栽培に適している。沢川は天竜川合流点より約３km上流で二つに分かれ、左手方面は日向地区と呼ばれ、有賀峠を越えて諏訪に及び、右手方面は日影地区と呼び、松尾峠を越え高遠に至る。

落合Ｂ、羽場垣外の二遺跡は合流点に近く、沢川の両岸にわずかな平地が形成されており、落合Ｂは斜面の片側に石垣を築いて狭い水田とし、羽場垣外は斜面に桑を植えて桑畑として養蚕を行っていた。

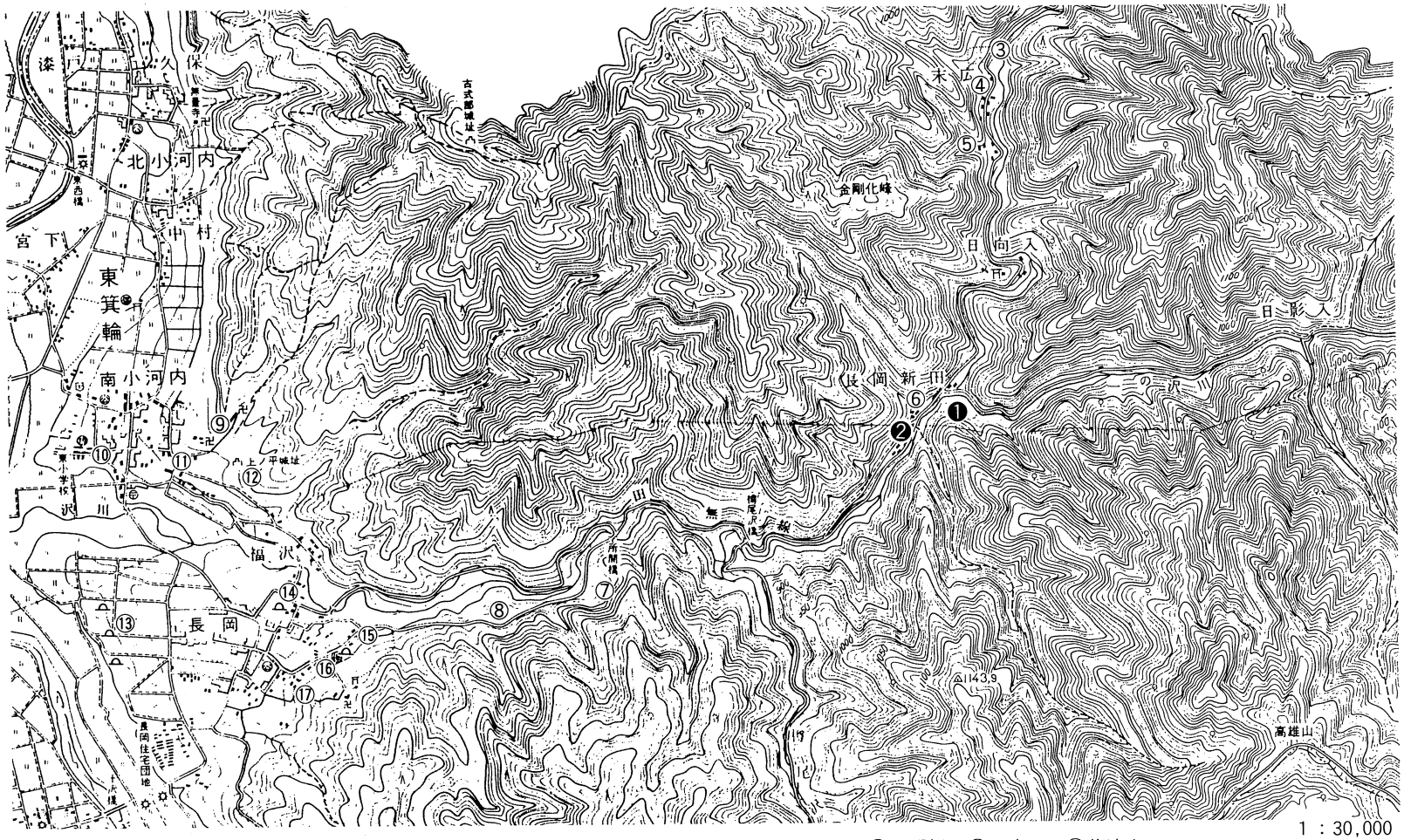
この一帯は花崗岩で、上伊那地質図（上伊那誌、自然篇）によれば領家花崗岩の中の高遠花崗岩となっている。花崗岩は風化が激しく、脆くなっており石英と雲母が降雨などによって流され易い地域である。ダムを築く場所は黒雲母粘板岩帯であり、使用する骨材もこれであろう。沢川に添って石英斑岩が数ヶ所露出している。日影地区には石灰岩が二ヶ所露出している。落合Ｂの標高は840m前後、羽場垣外は約832mで、天竜川面との比高は二遺跡とも約160mを計る。

第３節　歴史的環境

箕輪町内には多数の遺跡が確認されているが、特に天竜川東岸段丘上はその密度が最も高い地域である。長岡の台地上には多くの古墳が存在し古代からの繁栄を物語っている。一説には30基前後の古墳が分布していたと伝えられている。しかし、現在は10基程度が確認できるのみであり、現状では段丘上突端に位置する羽場の森古墳が最も形状の整ったもので、３基が連なっている。また、昭和62年に発掘・調査が行われた源波古墳は、長岡の古墳群の中でも最大級の部類に入る円墳で、台地の最上部に位置している。多数出土した馬具や刀等の副葬品から、当時の牧や豪族の存在を伺うことができる。

沢川周辺の遺跡中その代表的なものとして上の平遺跡がある。ここより出土した先土器時代の柳葉形尖頭器等は、町内では最も古い遺物の一つである。縄文時代に入ってからの遺物も豊富で、特に石鏃の検出数は多い。この遺跡から出土している遺物の時代的古さの点、また量的な面から見ても他の追随を許さぬところであり、先史よりの歴史に最も興味深い場所である。また、遺跡地は城跡としても県史跡に指定され、南信における最も古い城跡の一つとして研究史に輝いている。

萱野遺跡を初めとして、山中に入り込んでの遺跡が多いことから、長岡新田の谷間にも以前から遺跡の存在が予測されていた。末広地籍から収集された小形爪形掻器の一群は、時代的古さからも貴重な遺物である。



❶落合Ｂ　❷羽場垣外　③末広Ｂ　④末広Ａ　⑤黒尾　⑥落合Ａ　⑦所開橋　⑧一之沢　⑨普済寺

⑩殿屋敷　⑪日向前　⑫上の平　⑬羽場の森古墳１～３号　⑭角畑古墳　⑮源波古墳　⑯源波　⑰角道

第２図　遺跡分布図

これらの遺物の出土をふまえて、近年箕輪ダム建設による長岡新田地区の埋蔵文化財発掘調査において、出土した遺物は非常に古く、新田の歴史を一気に数千年の後方に引き上げたのである。黒尾遺跡より出土した遺物は、縄文時代早期の押型文土器や貝殻条痕文土器、爪型文土器などから、中期中葉にかけての比較的古い時代の遺物が多く見られ、また平安時代後期（11世紀）の遺構も、落合Ａ・末広Ａ両遺跡とともに見られる。長岡地籍入口付近にある一之沢遺跡も、これら長岡新田の遺跡とほぼ同時期のものと思われる縄文、平安時代の遺構・遺物が検出された。そして、ダム建設に伴う発掘調査も最終を迎え、新たな遺構・遺物の発見が予測される。

第II章　発掘調査の経過

第１節　調査の経過

昭和59年夏、遺跡の存在を確認するための確認調査が実施された。末広・落合・黒尾の三地籍である。この三地籍共に遺構及び遺物が確認されたため、本発掘調査となったのである。昭和60年度において末広Ａ・落合Ａ遺跡の本発掘調査と末広Ｂ・落合Ｂ・羽場垣外・所開橋南地点の四地区の確認調査を実施した。昭和61年度に黒尾遺跡の本発掘調査を、また昭和62年度に一之沢遺跡の本発掘調査を実施し、本年度は落合Ｂ・羽場垣外遺跡の本発掘調査となったのである。今回の発掘調査をもって箕輪ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の調査も最終となった。これが第５次調査である。

発掘調査は昭和63年８月31日～９月16日に至る間、実施されたのである。その結果、確認調査の際の遺構を含めて、縄文時代初期からそれ以後の遺構・遺物が検出された。以下、その概要を表示した。

第２節　調査の概要

○遺　跡　名　　落合Ｂ・羽場垣外遺跡
○所　在　地　　長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪長岡新田
○発 掘 期 間　　昭和63年８月31日～９月16日
○調査委託者　　長野県伊那建設事務所長　宮島和夫
○調査受託者　　箕輪町教育委員会
○調査団の構成は下記の通りである。

調査団

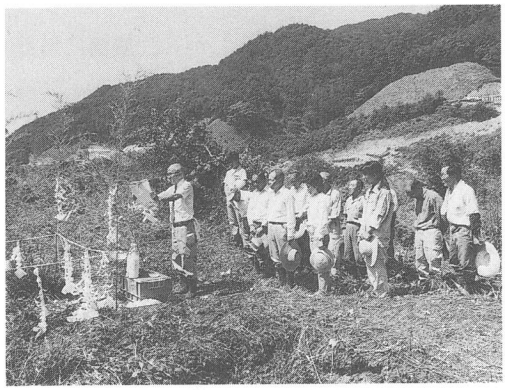
団　長　　樋口彦雄
担当者　　柴　登巳夫　箕輪町郷土博物館主任学芸員
調査員　　赤松　茂　　箕輪町郷土博物館臨時職員
調査員　　宮脇陽子

団　員　　荒川織光、井上武雄、大槻泰人、岡　　章、岡　　正、唐沢光国
小池久人、小林信義、清水すみ子、竹入洋子、戸田隆志、中坪侃一郎
根橋とし子、野村金吉、藤森秀男、松田幸雄、水田重雄

事務局

堀口　泉　　箕輪町教育委員会教育長
上島冨作夫　　箕輪町教育委員会社会教育課長
上田明勇　　箕輪町教育委員会社会教育係長
柴　登巳夫　　箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川　寛　　箕輪町郷土博物館学芸員
赤沼悦子　　箕輪町郷土博物館臨時職員
赤松　茂　　箕輪町郷土博物館臨時職員

第３節　調査日誌



８月31日　（水）　晴

発掘用機材とテントを発掘現場に運搬し、テントを設営した。明日からの落合Ｂ・羽場垣外両遺跡の発掘、調査の準備を行った。

９月１日　（木）　晴

本日より発掘、調査が開始された。最初に落合Ｂ遺跡を調査し、続いて羽場垣外遺跡に移動する予定である。両遺跡ともテントより上段にあるため、まず調査区までの道作りが行われた。落合Ｂ遺跡に長野県伊那建設事務所の担当者が御来席して、調査団の結団式及び神事が行われた。午後より掘りを始めるが、地形的に重機が入れないため作業はすべて手掘りで行い、過去に試掘を行った箇所のシートを取り除いた。

９月２日　（金）　晴

シートを取り除く作業が続けられ、その下から過去の試掘の際に検出された土坑、集石が再検出された。完全にシートを取り除いた後、整地しグリッドが設定され、掘りの作業に入った。遺物は、縄文土器片と黒曜石がわずかに出土したのみ。

９月３日　（土）　晴

新たに１基土坑が検出された以外に遺構は発見できず、土坑は全３基、集石は１基が検出された。遺物は縄文土器片数点が出土したのみ。各遺構の清掃をし測量を行った。午後より羽場垣外遺跡の表土はぎが重機によって開始された。

９月５日　（月）　曇

落合Ｂ遺跡全体の清掃が進められた。また、羽場垣外遺跡への道作りが行われ、明日からの発掘の準備も行った。

９月６日　（火）　曇のち雨

落合Ｂ遺跡の全体測量を行った。羽場垣外遺跡も重機による表土はぎが継続され、終了した場所からグリッドが設定され、掘りの作業に入った。午後、降雨のため作業を打ち切った。

９月７日　（水）　曇のち雨

グリッド掘りが継続される。Ｂ－５、Ｃ－５グリッドを中心に集石が２基検出された。またＡ－１グリッドはローム面までの堆積土が厚く

掘りに苦労する。遺物は全く出土しない。

9月8日　（木）　晴

グリッド掘りが続く。しかし、遺構に当たらない。重機での表土はぎ及び排土作業が再開する。C－11グリッドに溝状遺構が検出され、B－11、A－11グリッドを拡張した。またA－1グリッドが掘りあがり、土層堆積状態を測量した。

9月9日　（金）　晴

昨日に引き続きグリッド掘りと溝状遺構の掘りを行った。溝状遺構は深くV字型になっており掘りに時間がかかる。遺物は出土しない。

9月10日　（土）　曇

溝状遺構の掘りが継続して行われる。また、2基の集石の測量が行われた。

9月13日　（火）　晴

溝状遺構が追い込みに入り、ベルトを清掃し土層堆積状況の測量を行い、続いてベルトの解体作業に入った。ローム面まで約2mあるため測量も困難であった。午後、その平面測量を行った。また、調査区の東側が急斜面であり、その下にあるダム関連の事務所等の建物に土砂が流出しないように土止め作業を行った。測量終了後、埋め戻し作業が重機により行われた。

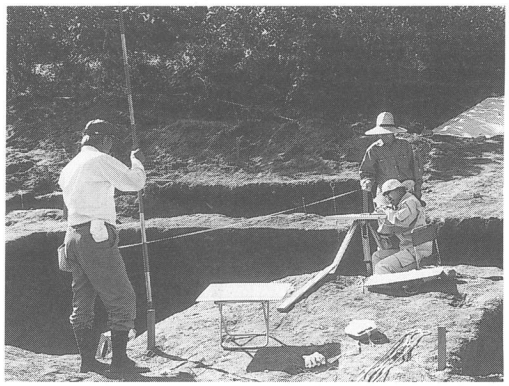
9月14日　（水）　晴

継続して埋め戻し作業が行われた。午後、テントを解体し発掘用機材と共に撤収作業を行った。

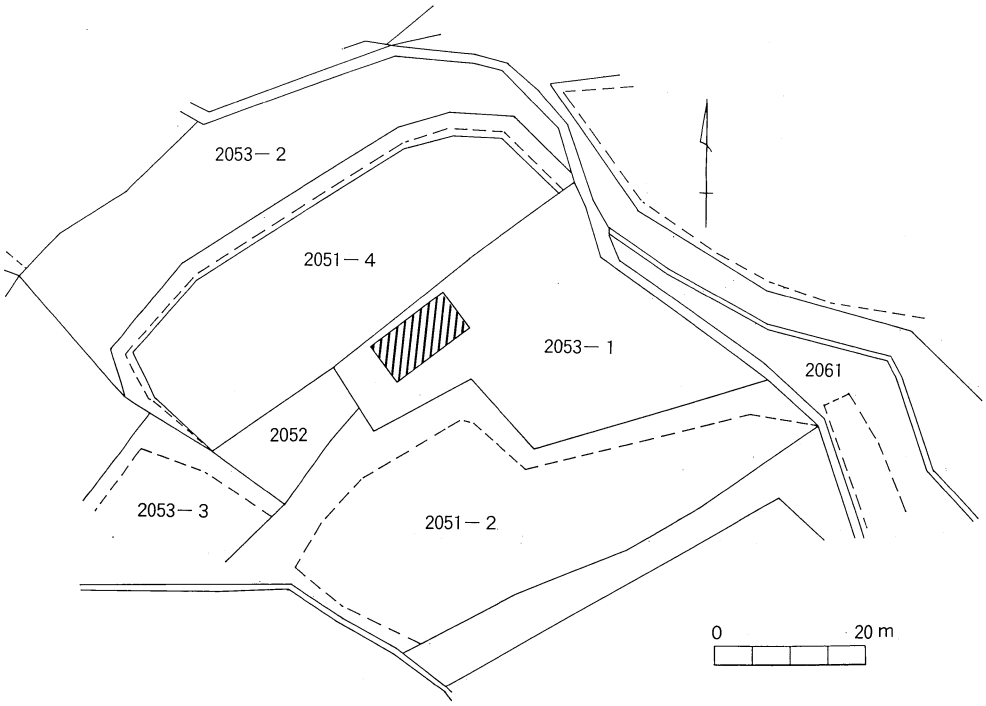
9月16日　（金）　晴

博物館に於て道具の手入れ、整備を行い、発掘調査が終了となった。

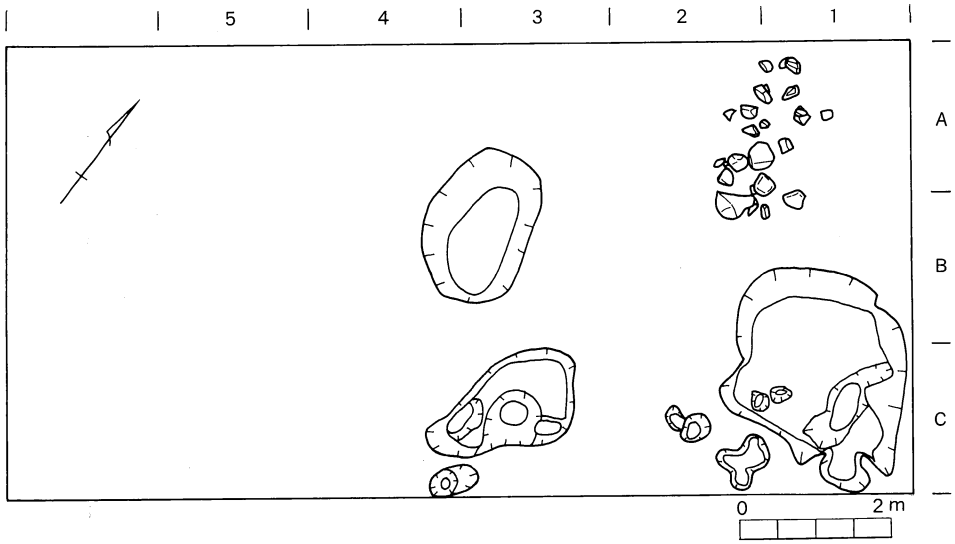
9月17日～前掘の中道遺跡と平行して整理作業が断続的に行われ、10月21日～は本格的に注記、拓本、実測、図版作成、執筆等、各作業が行われた。



第Ⅲ章　落合Ｂ遺跡の調査結果



第３図　落合Ｂ調査区設定図



第４図　全体図

第１節　調査結果の概要

昭和60年の確認調査時において、集石１基と土坑２基の存在が明らかになったいた。また、これらの遺構とは何ら関係ないと思われる縄文時代中期までの土器片が数点出土していた。今回の本発掘では、遺構・遺物が確認された範囲を中心に調査を実施した。土質は褐色系が主であった。Ａ－１～２グリッドから集石が検出された。石は拳大から枕大のものが25～６個散在していた。石質は花崗岩が多かったが、中には輝緑岩も含まれていた。また、Ｃ－１グリッドを中心として１号土坑、Ｂ－３グリッドを中心として２号土坑がそれぞれ検出された。１号土坑は長径３ｍ×短径2.5ｍの不整円形で規模が大きい。２号土坑は２ｍ×1.4ｍの小判型を呈する。いずれも再検出のため遺物は伴わなかった。Ｃ－３～４グリッドからは３号土坑が発見された。2.2ｍ×0.7ｍの楕円形を呈している。遺物は伴なわなかったため、土坑の用途や詳しい時期は不明。また、すり石等の石器数点と縄文土器片がわずかに出土した。各５グリッドより南西側からは、遺構・遺物は検出されなかった。

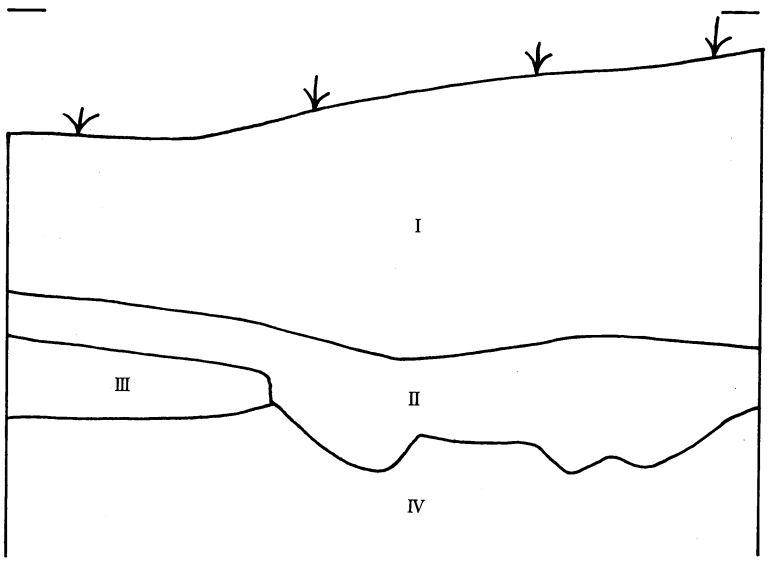
第２節　層序（第５図）

Ⅰ層－黒褐色土層（表土）。粘性はやや有るがしまりはない。小礫をまばらに含む。

Ⅱ層－暗茶褐色土層。粘性・しまり共にやや有り。土器をまばらに含む。

Ⅲ層－黒褐色土層。粘性やや有り、しまりは強い。土器をまばらに含む。

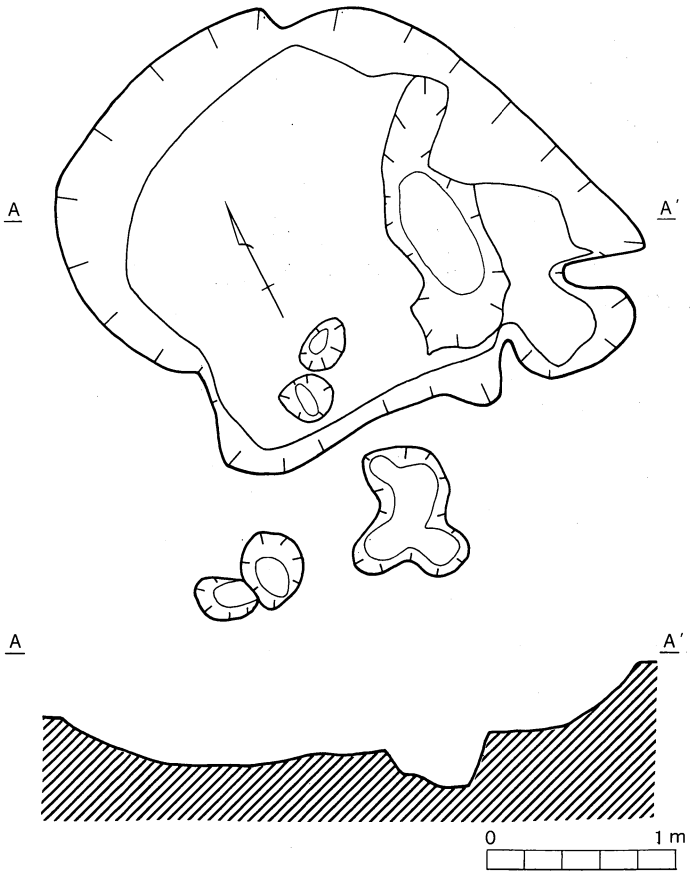
Ⅳ層－黄色土層（ローム層）。粘性・しまり共に強い。遺構確認面である。



第５図　土層断面図（Ｃ－２グリッド南壁）

第3節　遺　構

1）　1号土坑（第6図）

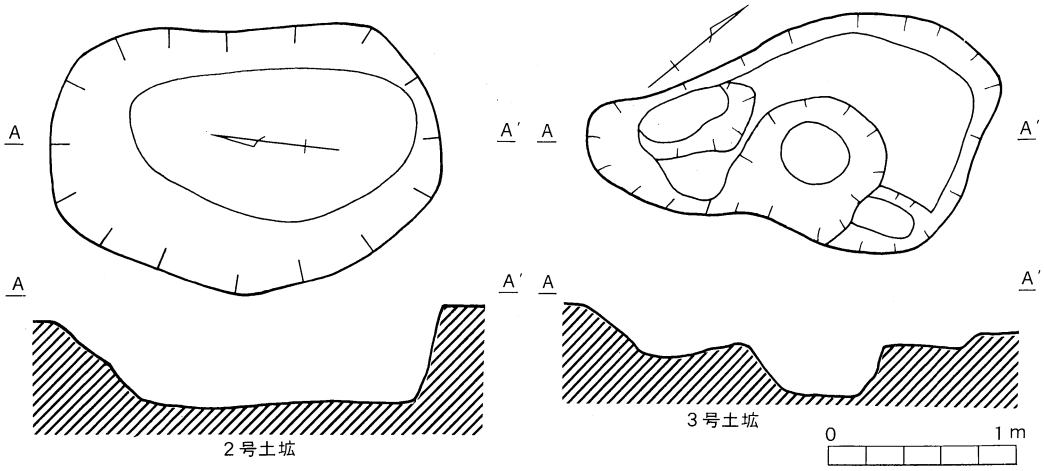


第6図　1号土坑実測図

調査区の東側隅のB－1グリッドからC－1グリッドにかけて位置している。長径3m、短径2.5mを計る不整円形を呈している。深さは平均して40cmほどだが最深部では70cmを計る。ローム層中に掘り込まれ、壁は底部から緩やかな孤を描いて立ち上がっている。底部は東側及び南側に2ヶのピットがあるが、ほぼ平坦である。2号・3号と比べてその規模は大きい。本土坑は確認調査の際にすでに確認されており、わずかに縄文土器片が出土していた。だが、その数から流れ込んだ可能性が強いと見て、土坑の時期決定には適当でないと考えられたため、詳しい時期や性格は不明である。

2）　2号土坑（第7図）

1号土坑の西側、A－3～4グリッド、B－3～4グリッドにかけて位置している。長径2m、短径1.4mを計る小判型を呈しており、長軸はほぼ南北に通っている。深さは50cmを計る。ローム層中に掘り込まれており、南側の壁はほぼ垂直に立ち上がる。東側及び北側はややラッパ状に開いて立ち上がる。底部は平坦である。1号土坑と同様に確認調査時に確認され、遺物もわずかながら縄文土器片が出土しているが、時期決定はできない。使用目的も埋葬用か貯蔵用かと考えられるが、その性格を決定し得る遺物がないため断定はできない。



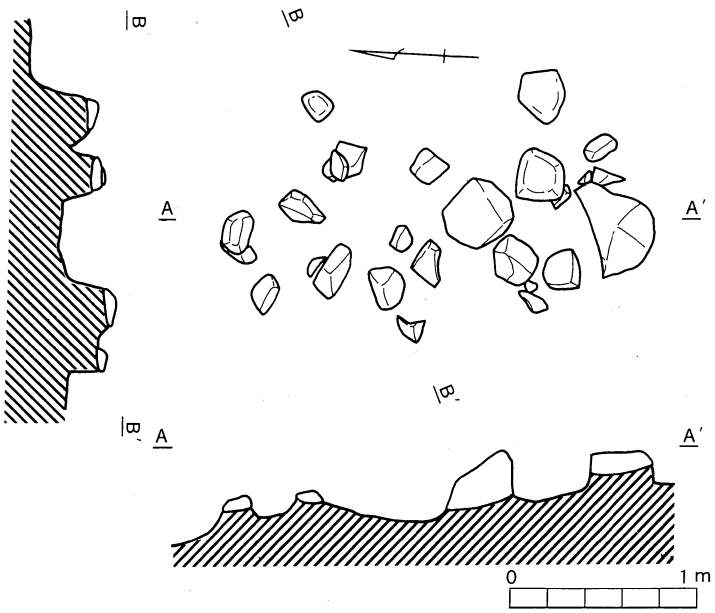
第７図　２・３号土坑実測図

３）　３号土坑（第７図）

２号土坑の南側、Ｃ－３～４グリッドに位置している。長径2.2m、短径0.7～1.3mを計る瓢形を呈している。深さは平均して30cmを計るが、最深部は50cmほどある。ローム層中に掘り込まれており、壁はラッパ状に緩やかに立ち上がる。底部は中央部にピットがあるほかは、ほぼ平坦である。周辺から縄文土器片が数点出土するが、土坑内からは全く出土しなかった。１号・２号土坑と同時期と思われるが、詳しい時期や性格は不明。

４）　集　石（第８図）

１号土坑の北西側、Ａ－１～２グリッドを中心に位置し、直径２m内外の円形範囲内に入っている。やや南北に長く配列された拳大から枕大の25～６個の石は密集するという状況ではなく、バラツキが多い。確認調査時に確認されていたが遺物は伴っていない。石質は花崗岩及び輝緑岩である。詳しい時期は不明。



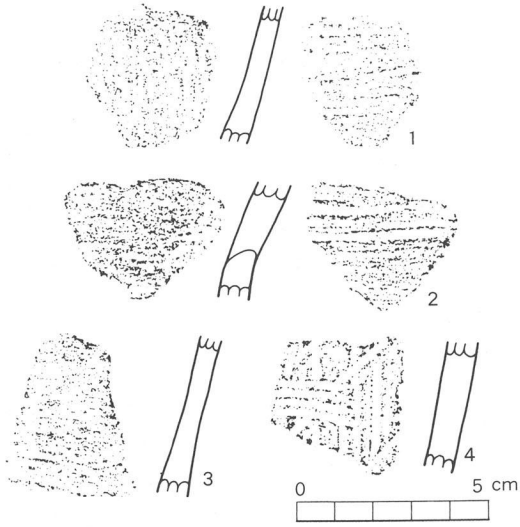
第８図　集石実測図

第４節　遺物

１）　土　器(第９図)

縄文土器・土師器、内耳土器・陶器の出土がみられたが、すべて遺構に伴わない細片ばかりであった。

１～３は、縄文時代早期後半の条痕文系土器群に属するものである。１は、表裏に条痕が施され、胎土は黒褐色で雲母を多く含む。２も表裏に条痕が施されるが、胎土は茶褐色で白色粒子と繊維を含む。３は、表面のみで、２と同様に胎土に白色粒子と繊維を含む。４は、半截竹管状工具による沈線文構成によるもので、縄文時代前期末から中期初頭に位置づけられよう。

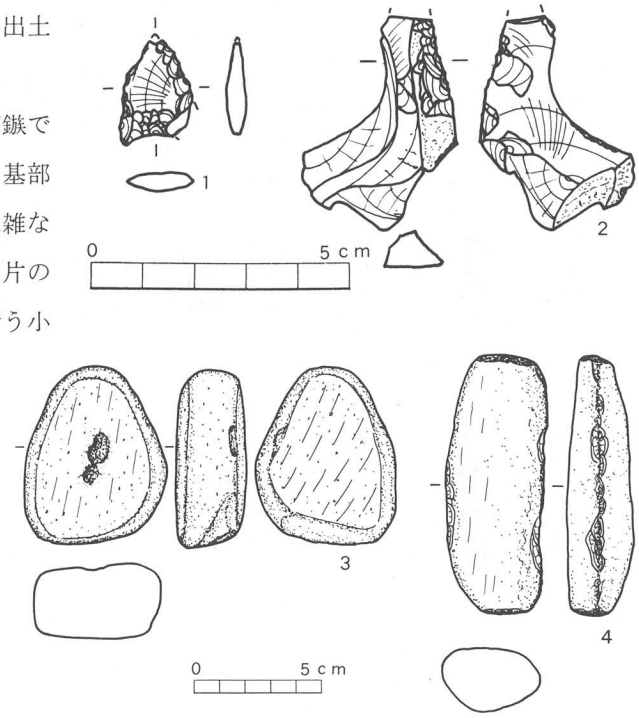


第９図　出土土器拓影図

２）　石　器(第10図)

石器も、土器と同様に遺構に伴う出土はみられなかった。

１は、黒曜石製による凹基無茎石鏃である。製作途中のものであるのか、基部と裏面に自然面が残り、側縁部には雑な調整がなされる。２は、不定形な剥片の一側縁に、片面より刃部の作出を行う小型剥片石器である。また、石質は黒曜石である。３は、磨石と凹石の両者の機能を有する兼用石器で、安山岩を用いている。４は、砂岩を用いた敲石で、側縁部は握りを意識して作出したのかは不明であるが、敲打による調整がなされ、頂・基部には、敲打による著しい使用痕が認められる。

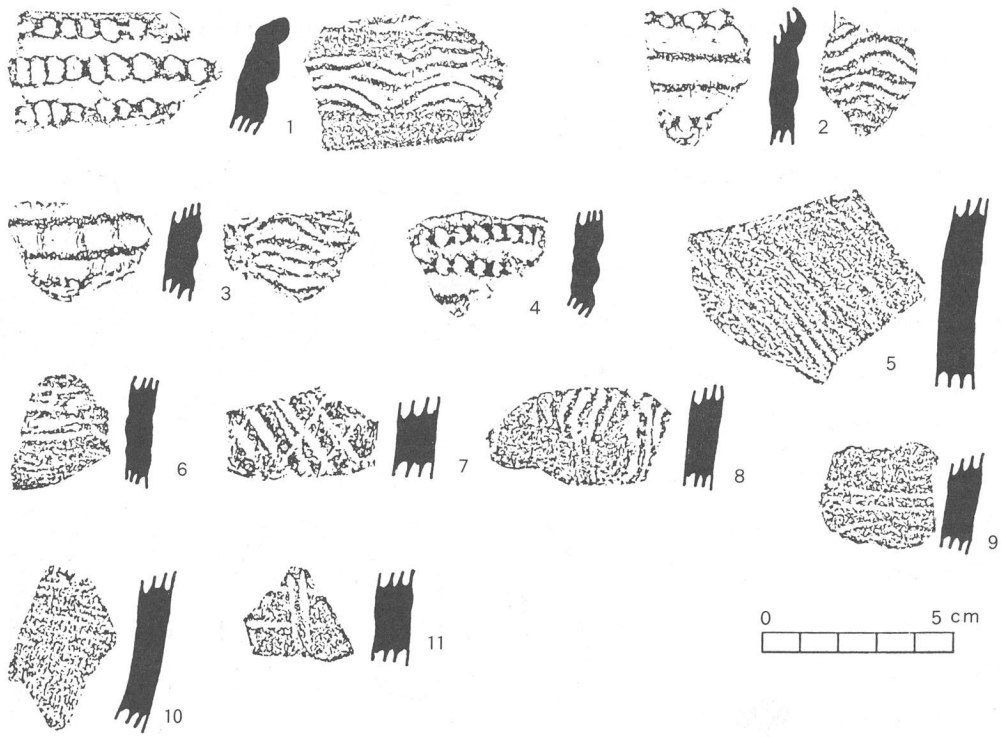


第10図　出土石器実測図

3） 既出遺物（第11図）

第11図１～11はグリッドから出土した土器片であり、遺構とは何んら関係がないと思われる。１～４は外面に低い隆帯を数条横位に貼り付け、その上に刻目を押捺し、内面には滑らかな波状文が施されている。少量の長石、雲母、石英を含み、焼成は普通である。色調は全般的に赤茶褐色系を呈す。東海地方に盛隆した上の山式から天神山式過渡期の土器と推測される。８は外面に縦位の波状文が走っている。土器の形態、その他諸々の事柄は１～４とほぼ同一である。５・６・９・10は外面に貝殻条痕文が無数に配されている。黒褐色５・９、赤褐色10、明白褐色６、を呈し、焼成は普通。５・９・10は多量の雲母、長石、石英を含んでいる。４片はともに多量の繊維を含み茅山系統の土器と思われる。

７・11は外面にヘラ先による沈線を交叉状に施し、意匠面を高めている。７は黒褐色、11は黄褐色を呈し、多量の雲母、長石を含み、焼成は普通。縄文中期初頭の一派と思われる。



第11図　既出遺物

図版1

調査地より南方を望む

調査地近景（北方より）

図版2

調査地全景（北方より）

土層断面

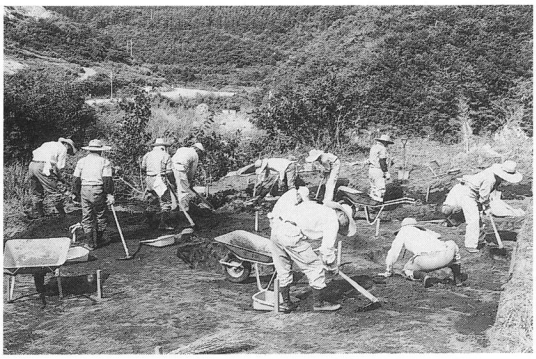
1号土坑

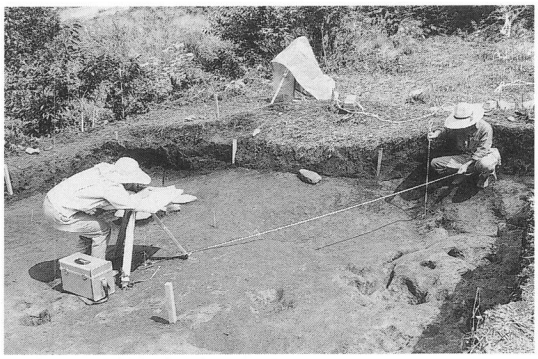
2号土坑

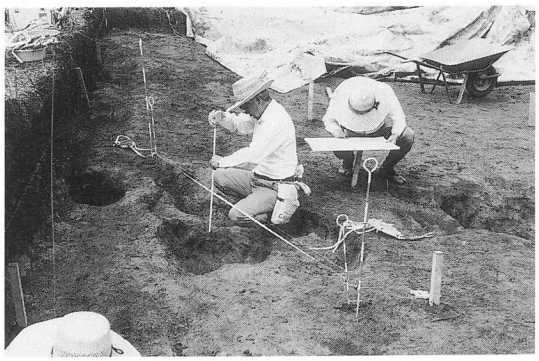
図版4

3号土坑

集石



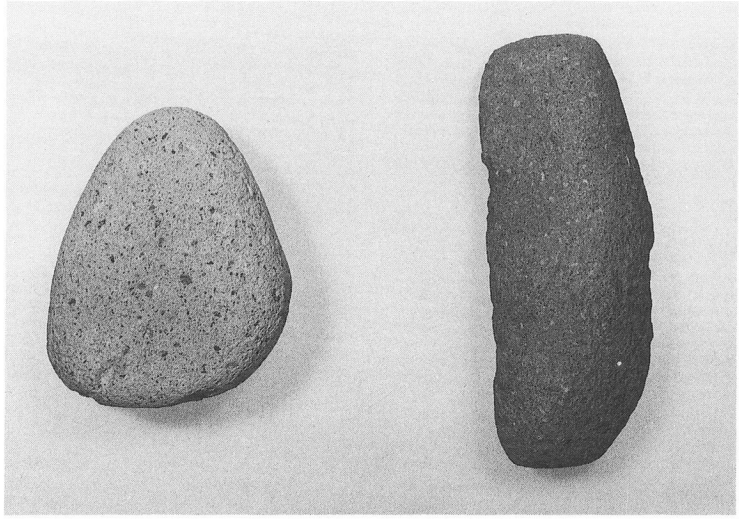




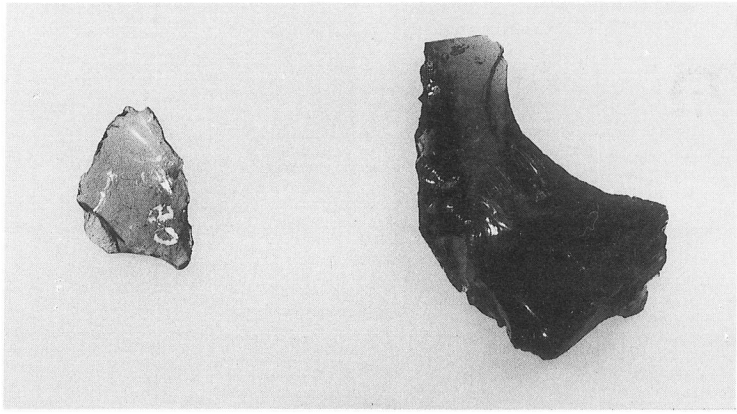
調査風景

図版6

出土土器



出土石器1

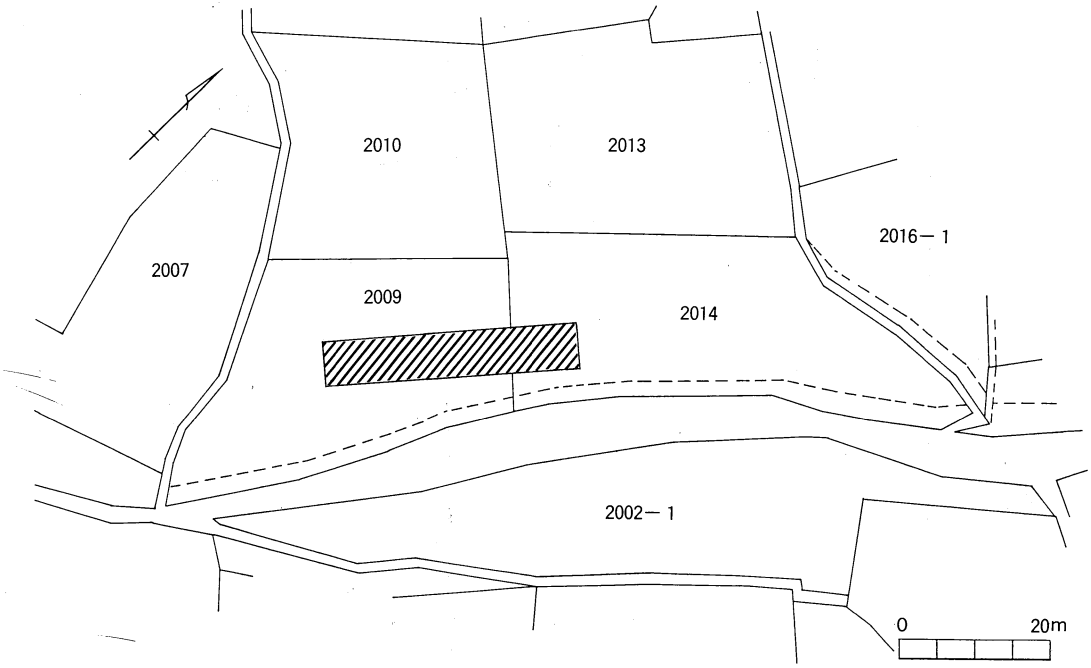


出土石器2

第Ⅳ章　羽場垣外遺跡の調査結果

第１節　調査結果の概要

昭和60年の確認調査時において、縄文時代早期の土器片と石器がわずかに出土していたが、遺構は確認されていなかった。調査地は位置とすると山の中腹に当たる場所にある。土質は主として褐色形で、風化した花崗岩が含まれていた。Ｃ－５～６グリッドから１号集石が、またＢ－４～５グリッドからは２号集石がそれぞれ発見された。２基とも遺物は伴わなかった。石質は花崗岩で、風化して脆いものもあった。２基の集石以外に集石は検出されなかったことから、人為的な感じはするが、石の積載状態や遺物がないことから自然的とも言える。更に、Ａ・Ｂ・Ｃ－各10～11グリッドにかけて溝址が発見された。長さ６ｍ余、最大幅3.6m、深さ2.2mと大規模である。断面はＶ字型を呈する。遺物を伴なわないため、用途や詳しい時期は不明である。また、石鏃が１つ出土したほか縄文土器片も数点グリッドから出土した。Ａ～Ｃ－12グリッドより南西側からは遺構・遺物は検出されなかった。



第12図　羽場垣外調査区設定図

第2節　層　序

調査区内において、土層堆積深度にばらつきがみられ、調査区に北側では深く南側では浅いという決果が得られた。特に北端のＡ－１グリッドでは、ローム層（Ⅸ層）まで2.8mもの深さを測り、８層にも及ぶ土層堆積状況を示している。また、全体的に花崗岩の風化砂礫を多く含んでいる。

Ⅰ層－茶褐色土層（表土）。粘性なし、しまり有り。小礫をまばらに含む。

Ⅱ層－暗茶褐色土層。粘性なし、しまりやや有り。

Ⅲ層－黄褐色土層。粘性・しまりなし。花崗岩風化粒子を多く含む。

Ⅳ層－黒褐色土層。粘性・しまりやや有り。

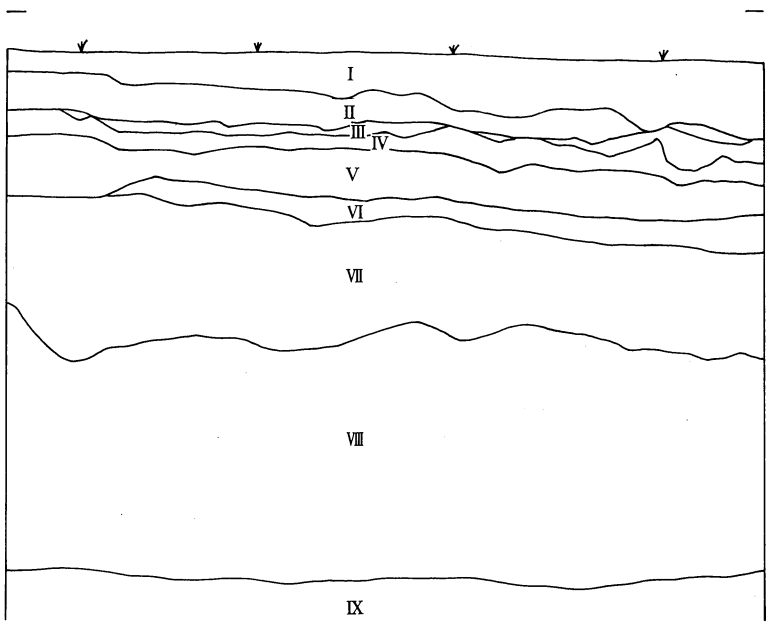
Ⅴ層－暗茶褐色土層。粘性やや有り、しまり有り。

Ⅵ層－黒褐色土層。粘性やや有り、しまりなし。

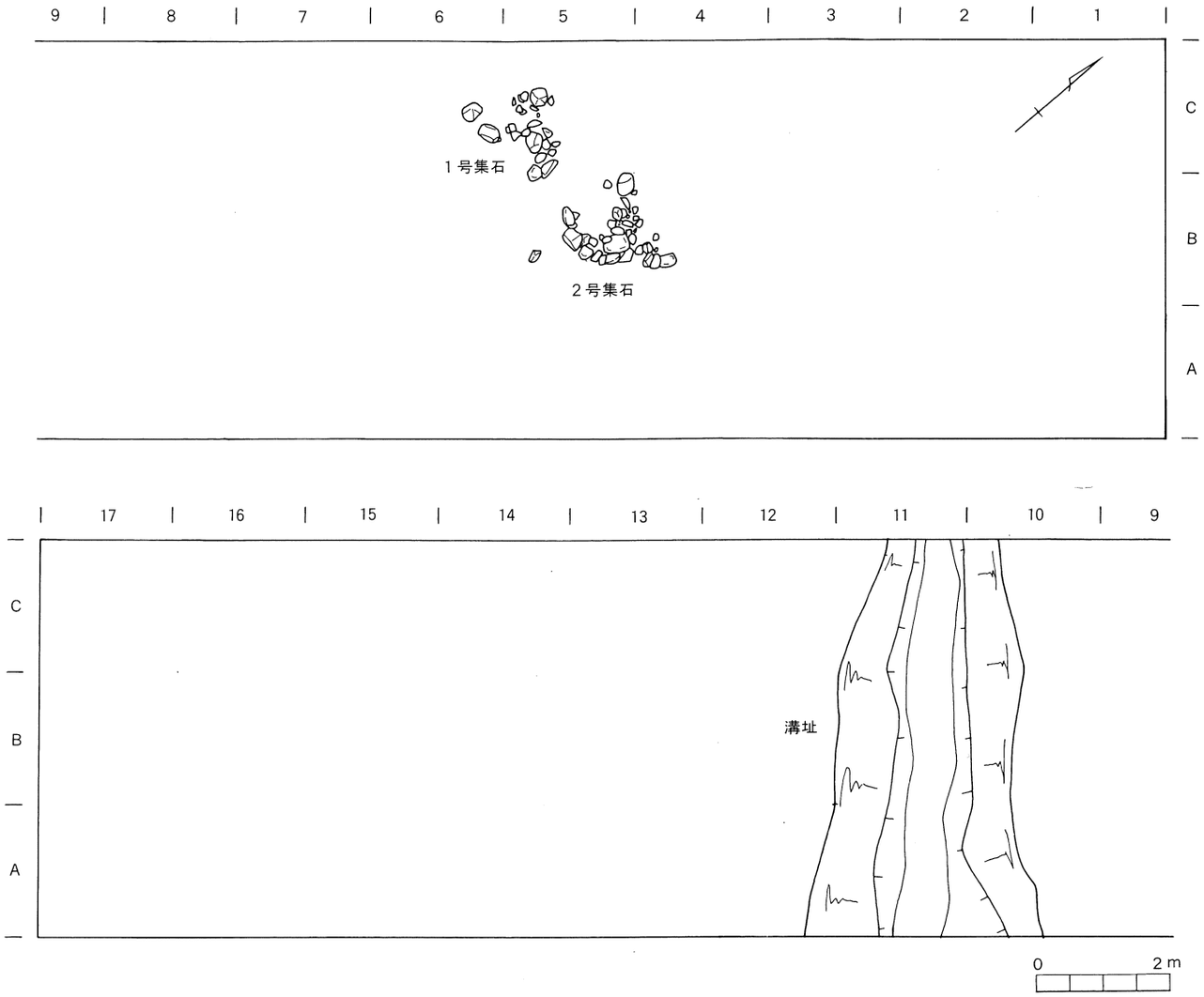
Ⅶ層－明茶褐色土層。粘性有り、しまりやや有り。集石確認面である。

Ⅷ層－黒褐色土層。粘性やや有り、しまり有り。土器等の遺物をまばらに含む。

Ⅸ層－黄色土層（ローム層）。粘性・しまり共に強く、やや砂質である。溝址確認面である。



第13図　土層断面図（Ａ－１グリッド北壁）



第14図　全体図

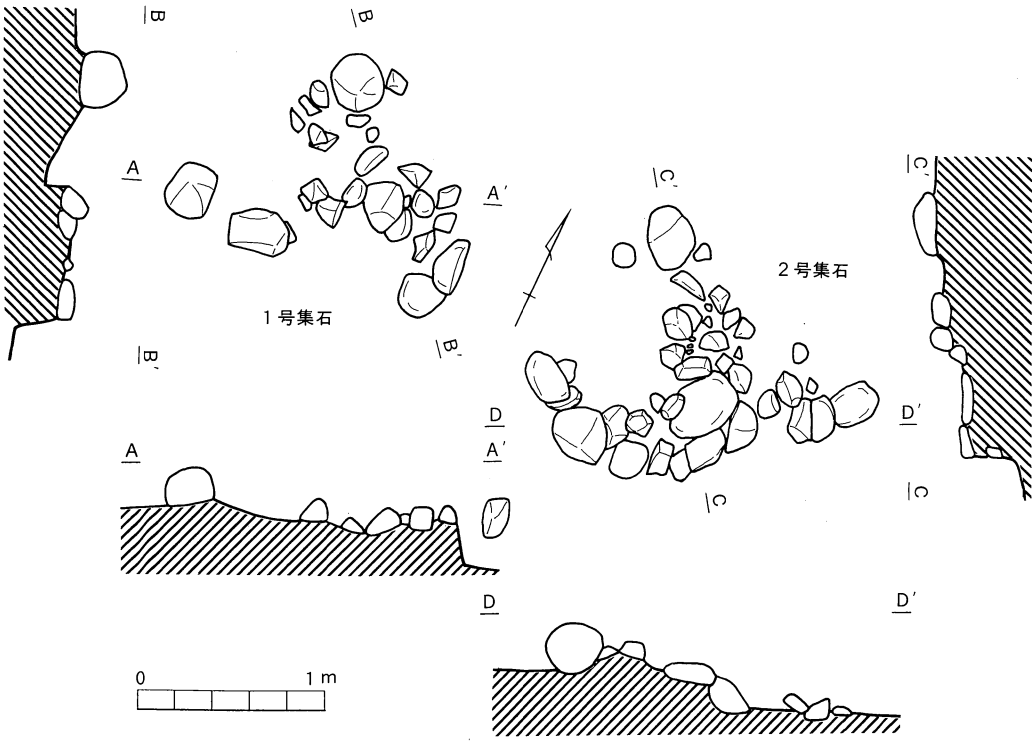
第３節　遺　構

１）　１号集石（第15図）

調査区東寄りのＣ－５～６グリッドに位置する。25～６個の石が1.4m×１mの楕円形内に入っている。石は密集する状態ではなくバラツイていた。石質はすべて花崗岩である。石は拳大から枕大のものがあり、拳大の石は角礫が多く中には割れているものもある。枕大の石は花崗岩が風化したものが多く、脆い。石は同一面上にあるが、いずれもⅦ層より出土した。石を除去した後の下方の調査においても、遺構・遺物は検出されなかったため、詳しい時期や性格については決定できず不明である。また、２号集石の他に類似遺構がないため人為的な感じはするが、遺物は伴なわないことなどから自然的とも思われ、断定はできない。

２）　２号集石（第15図）

１号集石より東側のＢ－４～５グリッドに位置する。約40個の石は錨型に似た形で配置されており、石はほぼ密集している。石は同一面上にはなく、東側ほど下っている。石の大きさは拳大から枕大で石質はやはり花崗岩であり、中に一つ石英の角礫があった。枕大の石は風化し

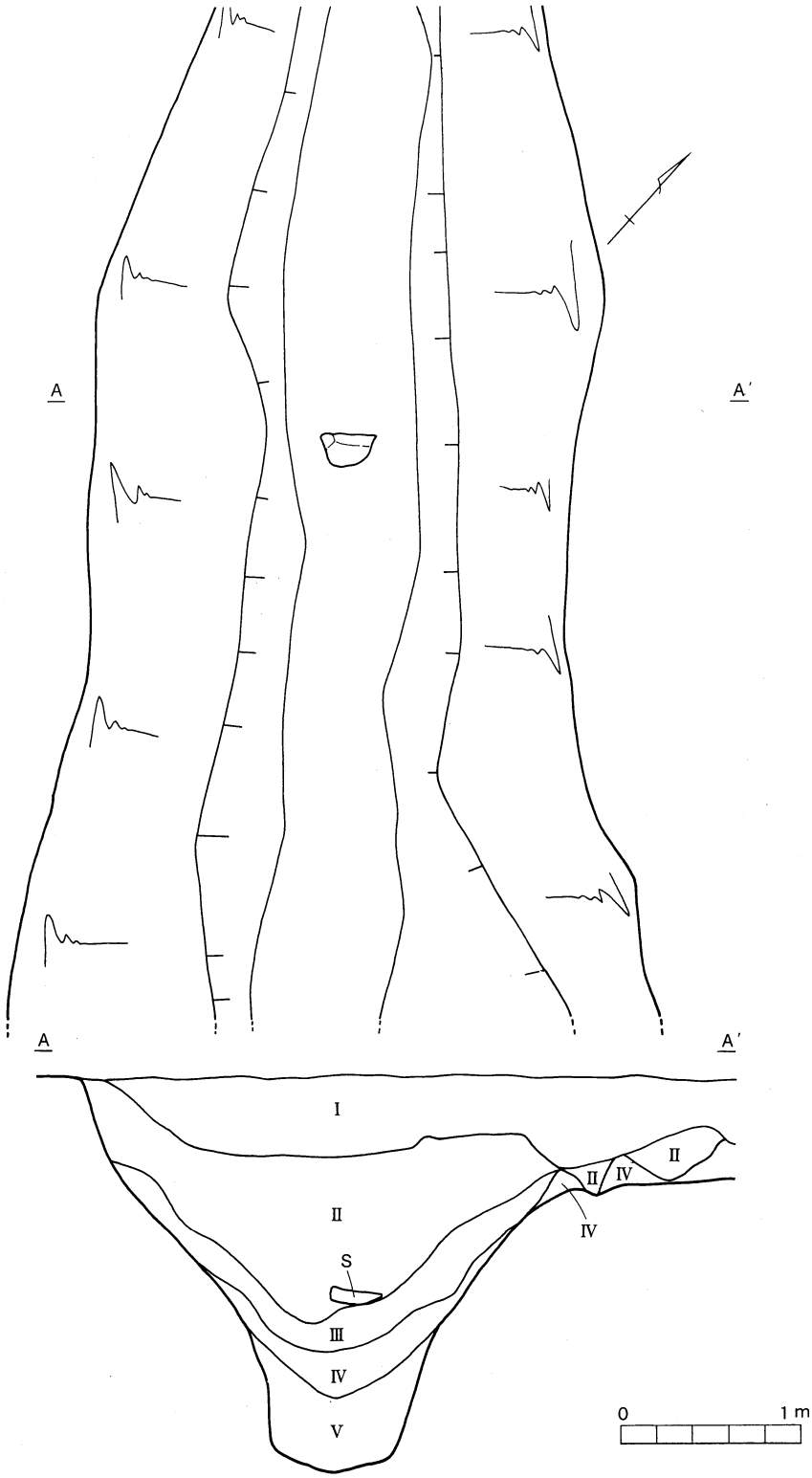


第15図　１・２号集石実測図

て脆くなっていた。石はほとんどがⅦ層から検出された。１号集石同様、集石内からの遺物は出土しなかったため、詳しい時期やその性格は不明だが、１号集石とは同時期と思われる。

３）　溝　址（第16図）

２基の集石より南西側のＡ・Ｂ・Ｃ－各10～11グリッドにかけて位置する大規模な遺構である。北西側及び、南東側の西端は調査区外に延びている。ローム層中に掘り込まれており、長さは６ｍ余、最大幅が3.6ｍ、深さは2.2ｍをそれぞれ計る。断面はＶ字型を呈するが、上部はややラッパ状に開いている。堆積土は６層に分層されているが、褐色土が主となる。Ⅰ層には微量ながら小礫が含有されていた。他の層には小礫は混じっていなかったが、全体的に風化した花崗岩混じりの土質であり、粘性はなくサラサラとしていた。また、Ⅱ層、Ⅴ層はロームが混入していた。底部に枕大の石があったが、覆土中からの遺物は全く出土しなかったため、その性格や詳しい時期は不明。本遺構は自然地形に添って山側から谷川へと掘削されており、遺物も伴なわないため、人為的とも自然的とも思われる。



第16図　溝址実測図

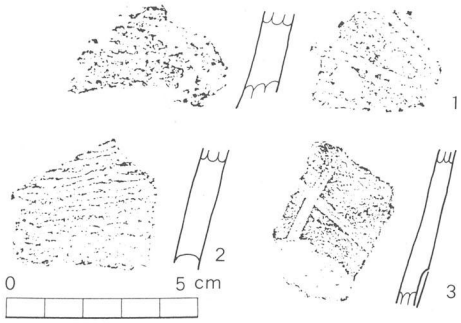
第4節　遺　物

1）　土　器（第17図）

縄文土器・土師器・陶器が出土しているが、すべて遺構に伴わない細片のみの出土である。

１は、表裏に条痕が施されるもので、茶褐色を呈し、繊維の混入が認められる。２は、撚糸文が施文される細片で、暗茶褐色を呈し雲母や小粒の礫を含む焼成良好なものであるが、繊維の混入は認められない。これら２点の特徴から、縄文時代早期後半に位置付けられるであろう。

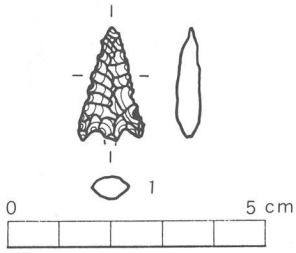
３は、表面に棒状工具による格子状の押し引き文が施される。胎土は緻密で焼成はよく、やはり１・２と同一時期に属するものであろうか。



第17図　出土土器拓影図

2）石　器（第18図）

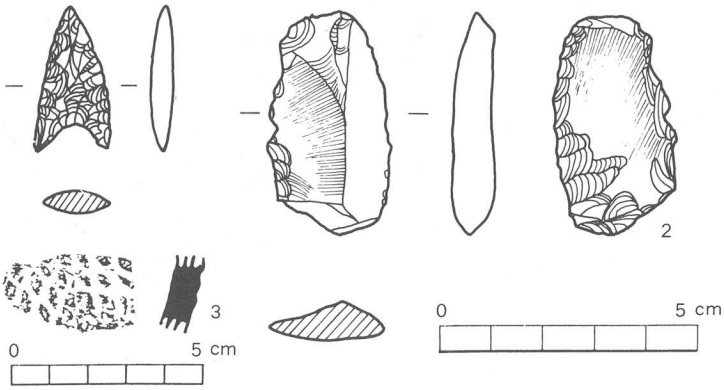
１の石鏃が、１点のみ出土しただけである。１は凹基有茎鏃に属するもので、丁寧に連続する調整を行い、鋭い刃部を作り出している。石質は、黒曜石である。



第18図　出土石器実測図

3）既出遺物（第19図）

第19図は、確認調査の際、試掘坑から出土した遺物である。１に示す石鏃は、全長2.9mとやや大きめの石鏃である。両縁辺は緩やかな湾曲を呈し、鋭い刃部を作り出している。両脚間の抉りは深く、逆U字状を呈する。完形の無茎鏃で石質は黒曜石である。２はスクレイパーである。長さは4.4cmを計り、中央に陵を持って両サイドに刃部を有する形で、サイドスクレイパーとしてはごく一般的な形状である。３は押型文土器片である。縄文早期押型文土器の出土は初見である。また、末広Ａ遺跡においても早期の土器を確認しており、今回の本調査との関連を伺うことができよう。



第19図　既出遺物

ま　と　め

ダム建設に伴う文化財保護の事業が始まってから数年が経過した。本年度における調査事業がこのことに関する区切りとなるため、今迄の経過と、実施中において気付いたことなどを記しまとめとしたい。

長岡新田の谷に箕輪ダム建設の計画が始まったのは、昭和40年代の中ごろのことである。50年代に入りダム建設は具体的な工事に入り、現在に至り、その形態が現れつつある。

言うまでもなくダム建設は、地形に大きな変化を及ぼすものであり、潭水地も広い面積に及んでいる。この事業によって文化財にも少なからず影響が考えられたのである。地形の変化する場所と潭水地内における埋蔵文化財には、直接大きな影響があり、それに伴い保護の問題が当然考えられなければならない。

昭和59年秋、県教育委員会文化課、伊那建設事務所、当町教育委員会等の関係者による現地協議が実施された。この時点で具体的な保護協議がスタートしたのである。以後本年まで、毎年のように発掘調査を実施し、記録保存を行って来ている。このことにより、長岡新田の歴史は一気に数千年の彼方に引き上げられたのである。

それ等のことを証明する遺物については、以前より研究者によって収集され予測はされていた。町内における考古学的研究の草分けである大槻幹・小川守人両氏は、新田の谷間から出土していた石器、土器類など多数収集している。末広地籍から収集した小型爪型掻器類は、一万年前のものといわれ、この時期において新田の谷に人々の生活が始まっていたのである。

昭和60年度には末広Ａ、落合Ａの２遺跡と、羽場垣外地点など４ヶ所の確認調査を実施した。この調査により、以前から予測していた時代の遺構・遺物の出土があり、確実に実証されたのであった。両遺跡共に11世紀代には、集石の存在したことが認められた。

続いて61年には黒尾遺跡の調査を行い、縄文時代中期後葉（曽利Ⅱ式）における祭祀的遺構の検出を見たのである。この地籍にも前述した２遺跡同様11世紀期代（平安時代後期）の遺構が確認されている。このような状況から、新田の谷に生活した人々は、最近まで人家の位置していた場所とほぼ一致していることがわかる。谷間から流れ出る小川に添った南斜面を住居地としている。人間が生活するのに適した自然条件は、いつの時代でも同じであることが感じられる。

昭和62年に実施した一之沢遺跡の調査は新田地籍においては入口の位置に在り、長岡地籍に近い場所である。不良土石の捨て場として急ぎ調査の必要となった場所である。この地籍は、調査面積も広いが、多数の遺構が検出された場所である。

そして昭和63年には、落合B・羽場垣外の２遺跡の調査を実施し、一応の区切りとなったわけである。

ここで本年度実施した落合B・羽場垣外両遺跡について少し概要を記すと、両遺跡共に、昭和60年度の確認調査において遺物が出土し、遺跡地となった場所である。落合B遺跡からは集石や土坑が確認され、縄文土器もわずかながら検出されていた。今年度はその確認調査時より大きく拡張して発掘を実施した。しかしながら若干の石器と土器の発見が見られたのみであった。傾斜地のテラスを利用した痕跡と考えられ、住居址を伴うような長期間の生活を予測するような状況には無い。この地点も完全に水没する場所である。

次に羽場垣外遺跡であるが、この地点は落合の合流点からやや下流の右岸傾斜地に位置している。確認調査時には、わずかの遺物が検出されたのみで、遺跡地として適当かとも考えられた地点である。結果は予測したとおり、きわめてわずかな内容であった。しかし、調査を実施したことにより、この地点における状況を知ることができ、それなりの意味を持った調査であったと思われる。

長岡新田に生活した人々の痕跡をたどり、時期的なまとめをすると、まず、小型爪型掻器を使用した時期、次に縄文時代早期の中ごろから後半にかけての押型文土器及び条痕文土器を伴う時期、羽状縄文土器を伴う前期中ごろから後半の時期、竹管状工具施文による中期初頭の時期、唐草文系の文様に見られる中期後葉（曽利Ⅱ式期）の時期、そして、平安時代後半（11世紀）の時期、中世後半から近世へと続いている。出土遺物に見る時期的な内容は以上のように考えられる。

縄文時代の早い時期から、中期に及ぶ遺物は、住居址等の遺構を伴った状況を確認することはできなかったが、末広A遺跡における土坑内より出土した前期土器、また黒尾遺跡の配石中に土器片を多数配置した祭祀的様相、これ等は、この時期に人々の生活の場としてしっかりとした足場が存在したことを物語るものと考えられる。

中期後半以後、平安時代後半（11世紀）まで、人々の生活の痕跡が途切れている。現段階ではこの時期の出土遺物などは確認されていない。

前述したように平安時代後半の時期になると、ほとんど時を同じくして、一斉に新田の谷に入って小さな集落を形成している。このような現象は一つ新田のみでなく、他の地区にもこのように山地に入り込む現象が見られる。第一次調査時点から続いて考えられていた問題点である。

水田経営には地理的にも気候的にも条件が悪い。しかし畑作で、焼き畑耕作には都合の良いところであったに違いない。その他、山に依存した生活、馬の飼育なども考えられるが、いずれにせよ新田のような地理的条件の元では、大きな規模のものはできなかったと思われる。また、この時期から諏訪への交通にこの谷を利用することになって、人々が入り込んだというこ

とも推測してみた。

それとも、租税を納めぬことを考えた隠田百姓の存在なのであろうか。また、11世紀という時期に一斉に新田の谷に入ったことにも何かの理由があったとも考えられる。

また各時期を通して、峠を隔ててはいるが、諏訪との文化交流があったと感じられる。このことについては出土遺物の再検討をしながら今後の研究課題の一つとして十分考えなければならない問題である。

さて、ダム建設の進行に伴い、埋蔵文化財の保護事業も数年間を経過したのであるが、調査の結果については、それぞれの調査報告書にまとめた内容である。今回の調査をもって一応の区切りとなるため、出発時点からの概要を記してみた。調査地の設定、方法、まとめ方等々反省点も多々あり、また、今後に残した課題も少なからずある。しかし、現時点において必要な記録保存を実施したと思っている。湖底に沈む広い面積は私たちの視野から無くなってしまうのであるが、記録として残った調査結果が、長岡新田の歴史を記す一助となれば、幸いと思う。調査に関係された多くの方々に深く感謝申し上げる次第である。

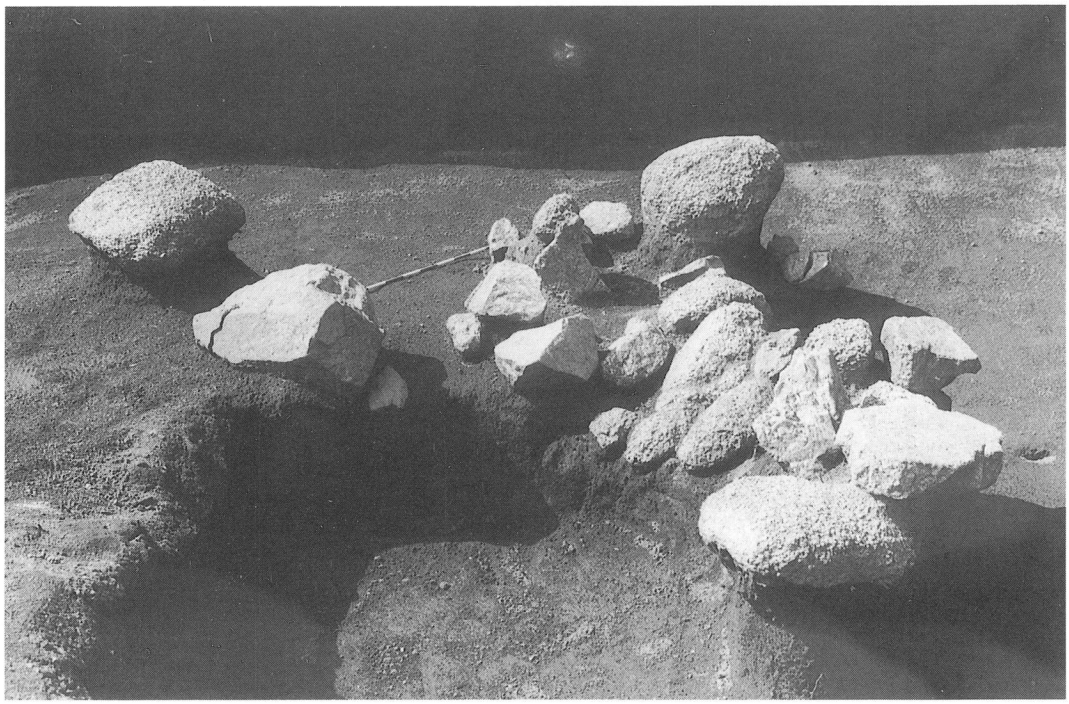
調査地より南方を望む

調査地近景（北方より）

図版8

調査区全景（南方より）

土層断面

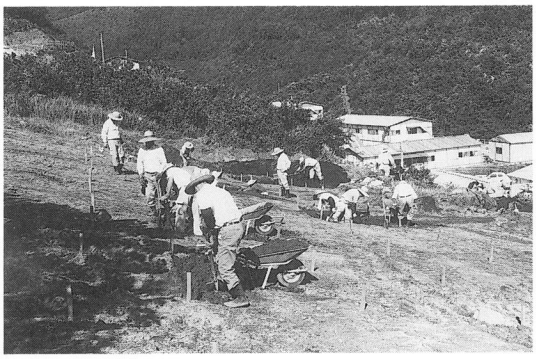


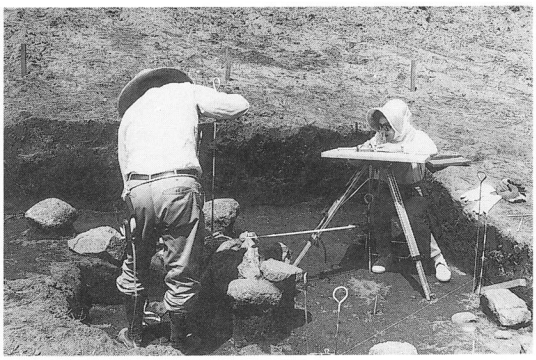
1号集石

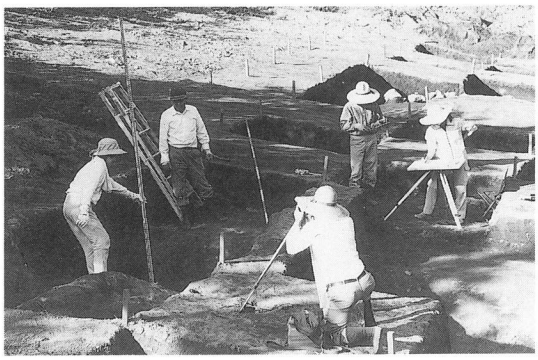
2号集石

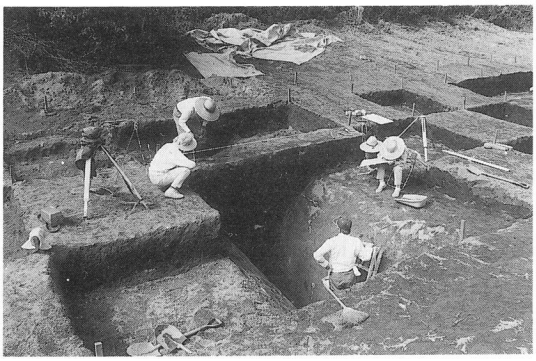
溝址

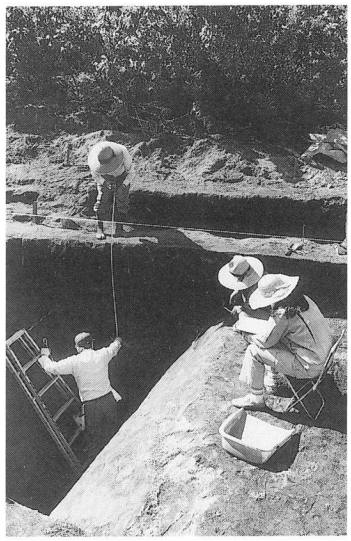
発掘調査団







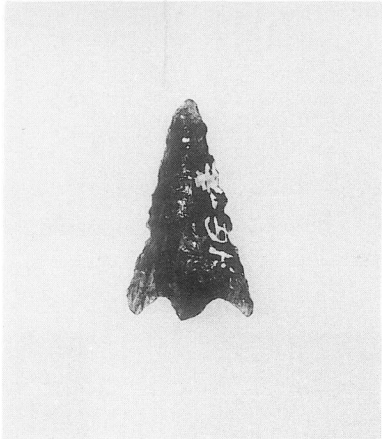




調査風景

図版12

出土土器



出土石器

長岡新田関係遺跡
（５次）
落合Ｂ・羽場垣外
発掘調査報告書

平成元年３月31日　印 刷
平成元年３月31日　発 行

発行所　長野県箕輪町教育委員会
印刷所　伊那市 ㈱小松総合印刷所